



15 桜雉子図 川端玉章 一面

絹本着色

明治二十七年（一八九四）

本紙一八・二×一七三・三

明治二十七年（一八九四）に明治天皇の大婚二十五年をお祝いして、牧野伸顕文部次官以下文部省職員一同から献上された一对の扁額の一面。揮毫を依頼されたのは玉章と橋本雅邦、二人の東京美術学校教授であった。

大婚二十五年の奉祝品ということで、玉章は雉子、雅邦は鶴、それぞれがいの禽鳥を描いている。玉章が描くのは、満開の山桜にとまる雌雄の雉子である。その背後では柳の枝葉が風になびき、画面左上では小さな鶯が控えめにさえずりながら春を告げている。画面全体に金泥をうすく刷き、また金の砂子を絵の上から蒔いて、慶祝の雰囲気盛り上げている。羽の一枚一枚までしっかりと描き込まれ、その上で自然な陰影をつけて着色された雉子の体軀は非常に量感があり、画面の主役としての十分な存在感を示している。一方で桜の幹や枝は一見勢いのある筆を無造作に重ねているように見えるが、一筆一筆の流れに注目すると幹の丸みを立体的に把握しようとするデッサン調の筆遣いであることに気がつく。また柳には小さな花が咲き、桜の花弁も折れたり裏返ったりと細やかな観察眼に基づき描写が目立つ。

明治二十年代後半は、壮年期にさしかかった玉章が、応挙の写実性と洋画表現を折衷した独自の画風を展開して、意欲的に制作を行なった時期である。本図に対しては当時、雉子が鳩や鳥のように小枝にとまる点が現実的ではないという批判もあったが（『文部省員献画扁額の評に就て』『絵画叢誌』第八十九号、明治二十七年六月）、そうした不自然さを感じさせないほどに、本図からは脂の乗りきった玉章の勢いが感じられる。左下に入れられた落款に「従七位源玉章謹寫」とある通り、応挙から円山応瑞、そして中島来章と受け継がれてきた源姓を玉章もまた使用した。自身の画風の淵源は応挙であるという玉章の強い自負がうかがえる。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

描き継ぐ日本美 — 円山派の伝統と発展

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 59

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年九月十五日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections